THE SAISON FOUNDATION
viewpoint
【vjú:póint: 視点、観点、見地、立場】

74
The Saison Foundation Newsletter
15 March 2016

セゾン文化財団ニュースレター 第74号
2016年3月15日発行
http://www.saison.or.jp
公益財団法人セゾン文化財団

特集◉正直、オリンピックってどうですか?

2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会の一環として、
文化プログラムが行われる予定である。
オリンピック憲章の根本原則第1には「スポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求する」
と明記されており、その精神を今後より強く表現することが決議された2012年ロンドン大会では
17万件以上の文化イベントが行われ、英国内外から4万人以上の芸術家が、
また一般からは4,000万人以上が参加した。
今度の東京大会に関して、文化庁では「文化力プロジェクト」の目標として、ロンドン大会を上回る
20万件の文化イベントを行い、5万人の芸術家と、一般から5,000万人の参加を目指している。
さらに東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会は
「文化・教育委員会」を、東京都は「文化プログラム検討部会」を発足している。
しかし行政が政策目標を掲げてその準備を進めるなか、
芸術家たちの声が社会や行政に十分に届いているのだろうか。本号では、
当財団がこれまでに助成している、世代や活動地域の異なる舞台芸術家11名に寄稿していただいた。

01 伊藤千枝◉会議 p.002
02 川村美紀子◉2020年 東京オリンピック p.002
03 霜田誠二◉人生の意味、文化芸術の意味 p.003
04 多田淳之介◉文化芸術途上国として p.003
05 塚原悠也◉アーティストと予算と格好良さについて p.004
06 捩子ぴじん◉文化の向かう先 p.004
07 羊屋白玉◉“Rest In Peace, Tokyo” p.005
08 平田オリザ◉オリンピックのこと p.005
09 三浦 基◉問われる企画力 p.006
10 南村千里◉ロンドン五輪から生まれたうねりを体感して p.006
11 山本卓卓◉オリンピックなんて知らない p.007
執筆者紹介 p.008
Information◉セゾン文化財団 事務所移転のお知らせ p.010

01

伊藤千枝
Chie ITO

会議

昨年7月上旬、ある会議に参加した。

「公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会　第1回文化・教育委員会ディスカッショングループ1（芸術）」という、非常に長いタイトルの会議である。

参加してほしいとの連絡を受け、なぜ私のところに連絡が来たのか見当がつかないまま担当の方々と事前打合せを行った。

そこでは今まで聞いたこともないオリンピック・パラリンピックに関しての壮大なビジョンが語られたが、それらは非常に抽象的であり、目指す結果を得るために具体的にどのようにしていけば良いのかわからないので、それらの点についてのアイデアが欲しいとのことだった。

できるだけ具体的なアイデアを。

私はそう理解した。

こうして恐れ多くも5名の若手有識者の1人として参加することになった。

私の仕事はこの件に関しての15分間のプレゼンテーションとその後のディスカッションに参加することであった。

そして当日。

結果は「失敗」である。時間切れで私のアイデアをすべて話すことができなかった。弁解の余地なし。すべて未熟な私の所為だ。このような機会をいただいたのに本当に申し訳ないと思っている。

そしてその後も若手有識者の方々がそれぞれ話し、まとめに入って会議は終了した。この会議では私が思うディスカッションは行われなかった。この場で議論し、少しでも具体的な話が出るかと思っていたが、そのようなことはなかった。

その後会議の様子はレポートにまとめられたようだが、今現在何かの役に立っているのかどうかわからない。会議中も委員会の方々からのリアクションはほとんどなく、私は話しっぱなしな感じに大きな違和感を覚えていた。具体的な事案はどこで誰が決めるのだろうか。

事前打合せで担当の方が「1964年東京オリンピック開催は戦後復活の象徴ともなった。今回のオリンピックでもそのようなモノを何か残したい。」と話していた。

「何を残したらよいか？　それをどのようにしたら残せるのか?」

この会議が何を目的に開催されたのか、また将来何の役に立つのか未だわからないでいる。

あれからすでに半年以上経った。

今でも様々な会議が続けられているはずである。会議で話されたことはもちろんのこと、会議に参加していない国民の声にも耳を傾け、それらの意見が多く反映されたオリンピックになることを切に願う。

02

川村美紀子
Mikiko KAWAMURA

2020年 東京オリンピック

「東京オリンピックが決まりました」

そんなニュースを、私はルーマニア・ブカレストにあるスタジオで見ていました。庭の野良猫にあいさつをして、ぽかぽかと陽の当たるテラスに座ると、「TOKYO!　わぁ～!!」ちいさなスマートフォンの画面の向こう側で、スーツを着たおじさんたちが嬉しそうにはしゃいでいました。2020年、30歳か…そんなことを思いながらぼんやりと眺めていたら、突然うしろからルーマニアのアーティストに「おめでとう!」と言われました。私は素直に「うーん、あんまり関係ないかも」と返しました。

オリンピックを経験したことがない私は、なぜオリンピックが盛り上がるのかわからないし、その仕組みもよく知りません。こんなにすごかったんだよ!と、興奮気味に昔のオリンピック映像を見せられても、なんか暑苦しくてちょっと怖いな…と思ってしまう自分がいます。

その後、クロアチアへ滞在制作をしに行くと、ザグレブで活動するアーティストたちもまた「東京オリンピック! おめでとう!」などと口にしていました。私はそこで初めて「あぁオリンピックって、おめでたいことだったのか」と認識しました。が、ベトナムでのパフォーマンスを終えて帰国すると、都知事が変わったり、競技場がもめていたり、ロゴマークがどうだ、ボランティアのユニフォームがなんだと、すでに戦いが繰り広げられているではありませんか。…アートだなぁ! そう感じると同時に、こうしてオリンピックは盛り上がっていくのかと思いました。

私は、日本女子体育大学にある“舞踊学専攻”というところで4年間ダンスやスポーツを学び、今はフリーのアーティストとして国内外で活動を続けています。卒業後はポーランドやNYをはじめ数々のアートフェスティバルで作品を上演したり、フィンランドやクロアチア、シンガポールなどで滞在制作をしてきました。毎度新しい出会いや発見ばかりで、とても素晴らしい経験をさせて頂いているなぁと感じています。

しかしダンスを通して人と関わるその中で、果たして自分のやっていることが何の役に立っているのか、誰のためになっているのか？今はカラダを消耗するばかりで、続ける楽しみを見出せないでいます。

今回記事のご依頼を頂き、初めてオリンピックについて考える機会を持つことが出来ました。もしも少しでも関わることができるなら、これまでの経験を生かしてオリンピックを盛り上げていくのはきっと面白いかもしれません。いつでも目の前にいる人を尊重するような寛容性のある世界で、私は懐の深いアーティストとして活動していけたらなと感じています。

03

霜田誠二
Seiji SHIMODA

人生の意味、文化芸術の意味

かつて海外のホテルで様々なスポーツ選手たちと一緒になったことがある。たいてい駐車場には彼らの移動用の大型バスが停車している。そんなところに私が泊まるのは、多分ヨーロッパで、選手達はサッカーのチームだ。中級以上のホテルに私のようなアーティストを泊めてくれるのは、芸術に理解があるヨーロッパだったはずだ。それも、多分あの国かあの国だ。実験的な生身の表現をより尊重しようとする国々。

今回の2回目になる東京オリンピックは、その始まりから現在までの動向を見ると一部の偏狭な心しか持たない人間たちが画策し、実施しようとしている。五輪の名さえ出せば、全て綺麗事で終わるとでもいうように。

その文化プログラムには大きな予算が付いて、それで可能になる催しも多いだろう。しかしそのお金はどこから来るのか。本来どこに使わなければいけない金か。もともとの日本の文化予算は低いから、どんな身元の金でもありがたく活用しようという動きも当然出てくるだろう。あるいは金の事よりも、世界から注目される2020年に日本や東京から発信できる文化芸術を作ろうという動きもあるだろう。

果たして、そもそも文化芸術とはなんなのだろう。これからの5年間はそのような議論を含めて、嵐のような厳しい時間を耐える日々になるのかもしれない。

でもそれは今に始まった事ではない。一人のアーティストである私が主催し1993年から運営開催している日本国際パフォーマンス・アート・フェスティバル（ニパフ）は、もう一つのニパフ・アジアを含めると計39回のフェスティバル開催で、これまでに500名ほどの芸術家を50ヵ国から招聘して開催している。

毎回地道に各種公的助成の申請をし、雀の涙ほどの助成金を最大限活用できるように各国へのリサーチや普及活動をし、日本で彼らと過ごす2週間ほどの日々を夢見て毎回準備に当たっている。近年は助成額も激減し開催不可能な程の金額でも、ない知恵を絞りより有効なラインナップを揃え少数の理解者と共に頑張っている。たかがパフォーマンス・アート。受け身の娯楽しか許容できない日本では頑張るしかない。それは、文化芸術にはとてつもなく長く辛い準備の時間が必要だと知っているから。自分がやらなければ、誰もそんなことを企画しないと知っているからだ。

文化芸術に公的支援があったほうが良いことは、自明の理だ。だからと言って危ない金に手を染めるなら、今までの苦労が水泡に消える。それどころか、その後も同様の金を求めて彼らの軍門に下り、いつの間にか自分がアーティストではなくなる。自分の人生の意味がなくなる。

04

多田淳之介
Junnosuke TADA

文化芸術途上国として

東京オリンピックについては招致の段階から反対の立場です。東日本大震災の復興も進まず、原発事故の収束もままならず、今後経済的に縮小の道を歩もうというのに何を戯けた事を言っているのか。今でもできることなら中止を望んでいます。身近なところで招致活動の一環として始まったフェスティバル/トーキョーは、不透明なディレクター解任を除けば評価に価すると思います。でもそれはディレクターはじめ制作者、芸術家、現場で関わっていた方々が、オリンピック招致云々ではなく、真摯に芸術に寄与すべく活動した結果です。それが芸術に関わる者の強みです。自分もオリンピック印の有無に関わらず、芸術に、人々に寄与できるよう引き続き活動していきます。

もしオリンピック招致の理由が、今の日本に必要なのは経済発展ではなくその代償として失った文化芸術の再建であり、失った心の豊かさ、文化芸術を大切にする心をオリンピックを期に取り戻し、文化芸術途上国として成長しよう、というのであれば賛成です。文化庁のHPなどを見れば、これからは心の豊かさ、文化芸術で日本を豊かにという文言はありますが、残念ながら日常そのような言葉を聞くことはありません。むしろ日本には既に優れた文化や芸術がありそれを発信していこうという雰囲気すら感じます。先日フィリピンのアーティストにクールジャパンという言葉を教えたら腹を抱えて笑っていました。誰が言ってるんだ？ 首相だ！ でまた爆笑。2020年は列島を揺るがす爆笑が起きかねません。

文化プログラムの目的は2020年以降の文化芸術立国の実現だそうですが、2050年実現くらいを目指してのスタートにするのが良いのではないでしょうか。まずは日本で生活する人たちが文化芸術の価値を認めるところからでしょう。文化芸術立国の前に文化芸術再生、今後決まっていく具体的な文化プログラムも、2020年に花開くものではなく、これまでの土壌作りを受け継ぎ、種を蒔き、今後継続可能な枠組みを作るプログラムを実施して欲しいものです。4年後の日本を想像するのも難しい時代ですが、文化プロジェクトに参加するであろう5万人の芸術家たちには、経済格差や進まない復興、文化、芸術への理解の低さ、様々な現状を真摯に見つめ、未来に向かって継続、成長できる活動を期待します。まだ途上にあると思える文化芸術は、数少ない日本の希望ですから。

05

塚原悠也
Yuya TSUKAHARA

アーティストと予算と格好良さについて

「オリンピック」と聞いて、もっとも記憶に残っているのはカナダ代表のベン・ジョンソンだ。彼の真似をして学校の短距離走などは「ロケット・スタート」を常に意識した。金メダル授与後にドーピング違反が発覚し、それを剥奪されたが、ぼくはそれも格好いいんじゃないかと感じた。それ以降のオリンピックはあまり細かく観ていない。芸術以前にスポーツそのものは自分の人生の半分以上を占めているが、オリンピックに何を期待するかというと正直あまり何もない。その熱狂が「作られたもの」に感じ始めたということがあるかもしれない。例えば、サッカーが何故23歳以下なのかとか、「プロ」のボクサーは何故出られないのかとか、冬季はなぜスノボ界の伝説テリエ・ハーコーセンは出場しないのかとか、こっちが勝ったからってルール変えるなとか、いろんな理由があります。

オリンピック開催の際は文化事業も重要な位置付けという認識が生まれていて、東京でも誘致に際して、そして開催決定以降、例えばロンドン大会を参照としながら様々な会議が開かれて議事録などのpdfがネット上に落ちている。眺めているとアートNPOがたくさん設立され「まちづくり」という言葉が流行り始めた頃にたくさん落ちていた研究報告等のpdfにとてもよく似ている。

ただぼくたち自身、東京が随分前から誘致を始めた頃から考えるとオリンピック由来の文化事業予算で仕事をもらってきたのも事実だ。「オリンピックってすげーなー。」と思いながら活動拠点の大阪から深夜の東名をふんふんと運転していたのを思い出します。また近年、幾度となく東南アジア諸国にゴンゾが行けたこともオリンピック開催決定に直接的間接的に影響している。そこで私たちは重要な友人たちと出会い、様々な思考を交換し自身を更新している。

ここ10年、東京にその予算があった場合となかった場合というのも比較してみると様々なことが見えてくるかもしれない（書いているうちに、概算要求13億円の文化庁オリンピック関連文化発信事業費削減と聞きましたが）。基本的にはどんな予算にも思惑があると思うし、それがすべて語られるわけではない。芸術もそことの折衝は生まれる。それは善でもなく悪でもなく、古くからの「状態」であるともいえるのではないか（建築にしろ、写真以前の絵画であれ発注者とともに様式が発達したとも言える）。

問題は非常に複雑で同時にとてもシンプルで、それは僕たち（誰?）が経済の無意識の欲望にどう飲まれていくのかということに尽きるのではないか（飲まれない、という状況もまた広義で飲まれていると理解したうえで）。ただ、想像以上に大きな予算は人々の意見にまで簡単に影響するし、ものの数年で人の考え方まで、気づかないうちに変えることもできる。そういう変化をよく見ていたい。（でも最終的に予算なしでも状況を作ることができる人がかっこいいですね。本来はそういうことですね。）

06

捩子ぴじん
Pijin NEJI

文化の向かう先

文化庁は2020年の東京五輪に向けて20万件の文化事業を企画し、国内外から5万人の芸術家と一般から5000万人の参加を目指している。五輪と文化事業開催の歴史、“文化”なるものの定義への言及はさておき、この文化事業企画は五輪の要となっている運動会に直接関わりを持たない人々にとっても、様々な経路で五輪に関わる機会となることは間違いない。それは同時に、五輪が開催される東京以外の地域でも文化事業が企画され、そこに生活する多くの人々が関連企画を通して五輪に関わることを意味している。

文化庁のサイトから「文化力」プロジェクトのページへアクセスすると、すでに始動している幾つかの企画名称を目にすることができる。“関西から文化力”、“丸ノ内から文化力”、“沖縄・九州から”、etc。確認できる事業は多種多様である。目標は20万件、5000万人である。参入機会が多いに越したことはない。ただしこの “〜から文化力”という名称の向かう先はどこなのだろう。事業立案の多様性を狭めることなく、方向を指し示す名称を付け加えることはできないだろうか。“〜へ文化力”。例えば “被災地へ”。五輪招致のプレゼンテーションでうたわれた “復興五輪”なる文言が方便になってはいけないのである。

先日、伊豆フォトミュージアム「戦争と平和」展において、1940年の東京五輪と万博招致を目指して、国内の写真家、デザイナーが取り組んだ対外資料を目にした。国際社会に向けた自国アピールのみならず、当時日本が植民地化した朝鮮半島、中国大陸へ向けたプロパガンダも含め、対外資料のグラフィックは鮮やかである。それが、第二次世界大戦が始まり、写真とデザインの向かう先が対外宣伝から対内プロパガンダへシフトしたとき、目に見えて明らかな変化が訪れる。

芸術家も、たとえ五輪開催を喜ぶものではなくとも、もし何らかの企画に携わる機会が訪れたなら、2021年以降を考えることが2020年に向けた4年間をスキップして未来を搾取するための思考になってはいけないし、忘却に加担する一過性の祭りにしてはいけないということを、肝に銘じておくべきだ。“〜へ”。我々は文化の向かう先を見過ごしてはならないし、その先に地理的のみならず時間的な五輪の “跡地利用”があることを忘れてはならない。

07

羊屋白玉
Shirotama HITSUJIYA

“Rest In Peace, Tokyo”

わたしは、2014年から、アーツカウンシル東京の事業のひとつである、文化創造拠点の形成（東京アートポイント計画）のなかで、「東京スープとブランケット紀行」というアートプロジェクトのディレクターをつとめています。アーツカウンシル東京が、2020年東京オリンピック・パラリンピックの文化プログラムに向けて、先導的役割を担うプロジェクトを展開するという目的を持っていることは知っていたので、最初、声をかけていただいた2013年の夏、「わたしは東京オリンピックを開催することは嫌なんですけど、そういう身でもいいんですか?」と、尋ねました。お返事は、ウエルカムでした。

「東京スープとブランケット紀行」は、22年間一緒に暮らした猫が、倒れた頃に、わたしの友人でもあり、猫の友人でもあった人たちが、大勢見舞いに駆けつけ、臥せっている猫の周りで、この猫が死んだらどう埋葬しようかという話し合いから、わたしたちにもやがてやってくる死についても話が発展し、亡くなった時には、いつも散歩をしていた庭の桜の樹の下に葬ろうと、スコップを持って集まった。という、個人的な体験から始まったプロジェクトです。

この体験と「東京」でアートプロジェクトをすることのつながりは、そのまま、東京での生活において起きるものごとの「終焉」と「起源」そして、「それらの間」というテーマに集約されました。恐らく、今の東京の醸し出す雰囲気や、現状とは逆行したプロジェクトだと思います。東京を葬る準備のプロジェクトだからです。

これまでに、伊豆諸島の最南端、人口190人余りの青ヶ島や、東京の西のはずれ、昭和9年に東京市の人々の水源を確保する為に、ダムに沈んだ村があった奥多摩湖を訪ねました。都心部の東京に住むわたしも含めて、多くの人たちは、どれだけ、それ以外の地域の恩恵にあずかりながら消費をしているのか、そして、蕩尽の果てにはなにがあるのか。という興味というか、知らなくてはいけないことを知るために、数年後には、演劇の作品を発表します。

「東京スープとブランケット紀行」に取りかかる際にわたしが書いた言葉を引用して、この文を締めくくりたいと思います。

「わたしにとって東京は、とっても長いこと、未来都市だった。今は、遺跡の街を歩いているように思う。どちらも美しい調べだけど、組曲『東京』の楽譜は、いまや、生活者であるわたし、演奏者であるわたし、が追いつかないほどの加速記号でいっぱいだ。この楽譜に、泉のような小休符をいくつか、記したい。そして、曲が終われば、長い長い、全休符がやってくる。その最後の小節の歌詞は、“Rest In Peace, Tokyo” なんにんものひとたちで謳いあげたい。」

08

平田オリザ
Oriza HIRATA

オリンピックのこと

たしか関川夏央さんの随筆の中に、「東京オリンピックにおいて初めて、日本人は、アフリカの黒人の走る姿を二時間以上にわたって凝視した」といった意味の一文があったと記憶している（原文は、もっと美しく格調の高いものだったはずだが、現在、海外に数ヶ月暮らしているので当たることが出来ない）。オリンピックとは本来、おそらくそのように、多くの国民に、何か分からないが、いままで見たことのないような共通の体験をさせてくれるものなのだろう。

数年前に『東京ノート』を日韓中の俳優を使って上演した際に、幾人かの観客の方から、「こちらの方が普通ですよね」という感想をいただいたのを印象深く覚えている。よく考えてみれば、今時、東京の風景を描く上で、外国人がいない方がリアリティーがない。しかし日本で作られる舞台作品のおそらく98%以上は、「日本人」しか登場しないのではあるまいか。

私は今、ドイツのハンブルクに滞在して州立歌劇場で新作オペラを制作している。ソリストは、最近ドイツ国籍を取ったウクライナ人以外、全員外国人。主要スタッフにもドイツ人はいない。しかし、そのことを問題にする雰囲気は全くない。ドイツの公立劇場の役割は、一つでも多くの歴史に残る作品を生み出すことにあり、もちろんそこでは国籍や民族は問題とならない。

翻って、日本はどうだろう。たとえば、あれほどの成功をおさめている瀬戸内国際芸術祭を巡って、ディレクターの北川フラム氏が県議会に呼び出され、「もっと地元のアーティストを登用しろ」と詰問されるという事態がつい最近起こった。独仏で、このような発言をすれば、その政治家はレイシストと目されるだろう。しかし、その発言をした県議会議員に、「それは人種差別的発言と捉えられる可能性がありますよ」と忠告しても、おそらくは、きょとんとされるだけだろう。

彼我の差は大きい。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックが、日本人に、何か言葉にはならない共通の体験をもたらすとするならば、おそらくこの点、世界はすでにクレオール化しているということを、文字通り肌身にしみて感じるところにしかないだろう。そして、それには、アベベというランナーを二時間以上凝視するというような、一定以上の時間が必要だとするならば、文化プログラムの量の確保も間違っていないのかもしれない。

かつて、一度だけ、滅び行く老大国がオリンピックを開催したことがある。1980年のモスクワオリンピックだ。その十年後、ソヴィエト連邦は瓦解する。史上最も寂しかったあのオリンピックからモスクワの人々が感じ取った何ものかが、のちにペレストロイカを推し進め、ソヴィエト解体の原動力となったのだとしたら、2020年の東京で私たちが感じる事柄も、あながち無意味とは言えないはずだ。

09

三浦 基
Motoi MIURA

問われる企画力

2012年のロンドンオリンピック開催の折り、グローブ座からの依頼で『コリオレイナス』を上演しに行った。シェイクスピアの全37戯曲をそれぞれ異なる言語で上演するというフェスティバルで、日本語代表が私の劇団「地点」だった。はじめ依頼があったとき、どうして私が選ばれたのかよくわからず、あまり乗り気ではなかったが、そういう曖昧な反応を察知してか、あれよという間にプロデューサーが京都まで来てしまった。ちょうど『かもめ』を上演していたのだが、それを観てきちんとした感想を言ってくれたので断るわけにいかなくなった。いざ、グローブ座に行くと、連日満員で延べ2000人を超える観客が日本からきた小さな劇団に大喝采を浴びせた。プロデューサーの情熱があのフェスティバルを成功させたのである。

ロンドンオリンピックも東京とたぶん同じで、大都市で今さらオリンピックを開催することに反対の空気があったらしい。ところが私たちが現地入りしたときには何も感じなかった。つまりオリンピックだからというお祭り騒ぎも特になかったし、いつもの大都市ロンドンだったと思う。オリンピック記念であろうがなかろうが、現場はいつも通りだった。

さて、東京オリンピックでは、ロンドンを上回る数の文化事業を展開する方針が打ち出されている。見ものだと思う。果たしてグローブ座のような企画力を持った劇場が日本にあるのかどうか。『コリオレイナス』は、その後、ロシア3都市、フィンランド、京都、東京と実に2年間も再演を重ねる作品になった。オリンピックはきっかけでしかない。文化事業を国がどうこうしようとしても目が行き届かないことはどの国でも同じだろう。重要なのは、その機会に踊らされることなく、真摯に企画を考え、単発のイベントで終わらせないことに現場が向かえるかどうかだ。

その上で、私は東京オリンピックの文化事業では伝統芸能が活躍すべきだと思っている。海外からのお客さんが期待する日本固有の舞台芸術といえば、結局、伝統芸能ではないか。これを機にいじめられた上方文楽にも手厚い支援をとすら思っている。京都市長は、オリンピック招致が決まった際「スポーツは東京で、文化は京都で」と即座に発言した。やれるものならやってほしい。どれだけ観客を惹きつける企画ができるかどうか。よくよく考えれば、シェイクスピアはもちろんイギリスの伝統演劇なのだから、彼らは何も間違っていなかった。競技場やエンブレムひとつ作れないこの国で、何を文化だと打ち出すのか。

10

南村千里
Chisato MINAMIMURA

ロンドン五輪から生まれたうねりを体感して

2012年ロンドン五輪が始まる1年半前、劇団グレイアイ[1]と国立サーカス・アート・センターとの合同プロジェクトで、障碍のある人たちのためのエアリアル（空中演技）コースが設けられ、私を含む5人が参加し、様々なエアリアルの技能を学びました。

各障碍者に応じたアクセスビリティ[2]が配慮された指導の下、既にある程度定着したムーブメントが、私たちのからだを通してまた異なる、新しいムーブメントになっていくことに、教師たちは驚喜しました。

このコースの最終日に行われた公開プレゼンテーションに、オリンピック委員会が視察に来ました。

グレイアイの演出家で、私と同じ聴覚障碍者であるジェニー・シーレイは、彼らに言いました。

「このコースに参加した彼らは、週に1度のペースで1年に45時間学んだ結果、ここまで上達したのです。このように、障碍のある人たちにも可能性があります。」

足のない人は、下半身の軽さを利用して空中ブランコを満喫し、目が見えない人は、コクーンの高い処から勢いよく地上ギリギリの処まで落下することを楽しむなど、難度の高い技を次々に繰り出すようになっていき、確実に、私たちの技術は上達しました。

このように「できない」という固定概念を壊し、「できる、更に発展できる」ことを、身をもって証明したのです。

ジェニーはパラリンピック開会式の共同芸術監督に就任し、オーディションで選抜された障碍のあるパフォーマーたちが、開会式に臨みました。

ロンドンパラリンピック開会式のテーマは、「啓蒙」でした。

物理的障壁や精神的障壁のある、障碍者に対する差別、これをなくし、五輪のような公の、姿の見える場で、「障碍」とは何か、障碍のある人たちの素晴らしい能力を示すことで、障碍のある人たちについての見方を変えていきたいという思いがこもっています。このように多くの障碍のあるパフォーマーが開会式で踊ったことは、今までの五輪の歴史上初めてで、画期的なことでした。

このロンドン五輪の文化プログラムの一つ、障碍のある芸術家の創造性あふれる活動を支援する「アンリミテッド」がレガシーとして2年に一度開催されています。

この第二回アンリミテッド2014年に、私のダンスとデジタルアートとのコラボレーション振付作「Ring the Changes+」が選出され、上演されました。

この作品は、私自身のきこえない視点から模索し、視覚的に捉え

た音/音楽を、図形譜[3]を用いて振付をおこなったものです。「きこえない」ことで生まれた固定概念を壊して創り上げた新しいアートです。

文化芸術は人によって生まれるものであり、2020年東京五輪に向けての文化プログラムも、お互いに違うことを分かち合い、ぶつかり合い、共鳴し、共に歩み創り上げていくことができればと期待しています。それが大きな新たなうねりとなって世界に伝わっていくと思います。

註
1）劇団グレイアイ：身体障碍のあるプロの俳優やスタッフによる英国の劇団
2）アクセシビリティ：障碍者、高齢者などがアートやパフォーマンスに円滑に親しみ、関連できるよう、移動や情報などが保障された環境
3）図形譜：南村千里によって数字や図形を用いて書かれた楽譜
参照／Minamimura App
https://itunes.apple.com/us/app/minamimura/id1002028577?mt=8

11

山本卓卓
Suguru YAMAMOTO

オリンピックなんて知らない

多様性の実感

幼少期山梨の田舎に住んでいた時分、私にとって外国人という存在はテレビのワイドショーでの報道や、スクリーンの中のジャッキー・チェンやマイケル・J.フォックスでしかなかった。英語の授業でのALT（Assistant Language Teacher）と呼ばれる先生も、コミュニケーションといえる程の個人的接触もなく距離は遠かった。グローバリゼーションや多様性といった言葉は、田舎に住む私たちには何の実感もなく素通りされていた。

進学に伴って2006年から東京に住み始めたが、当時と比較してもこと最近は外国人の多さに驚いている。新宿のビックロで買い物をする中国人を見かけないことはないし、武蔵小山の黄金湯には恥ずかしそうに下腹部をタオルで覆うヨーロッパ人を見かける。そういえば先日多摩川の河川敷でクリケットに耽るインド人一行を見た。多摩川の河川敷といえばキャッチボールというイメージがなんとなくあったので、見慣れない集団スポーツの風景に魅入ってしまった。オリンピックに向けて国が国外へのプレゼンテーションを図っていく中で、こうした風景を目にすることや実際的に私たちが外国人と触れ合う機会もより増えていくだろう。

テレビとオリンピック

私にとってオリンピックはテレビの中の出来事でしかなかった。1964年の東京オリンピックもテレビのアーカイブで知った。長野オリンピックもテレビ。北京もテレビ、ロンドンもテレビだ。テレビの外へ一歩踏み出せば、オリンピックなんて知らない。この日のために身を粉にしてきたアスリート達には申し訳ない限りだが、つまりはオリンピックに関心がないし、ましてその文化プログラムがイケてると思えたためしもないのだ。平和の祭典と呼ばれるほどに平和的な行事だともさして思わなかった。互いの文化を認め合うことやその困難さに直面することよりも、日本は金メダルを何個取りました、それは世界で何番目です、頑張れ日本、そういったことばかりが私の知っているオリンピックのすべてだ。

異文化に目配せする余裕も、多様性を受け入れる度量もままならないまま、半ば暴力的に外国人と触れ合う機会ばかりが増えていく。その中で私たちは「おもてなし」なんかできるのだろうか。より排他的になりはしまいか。オリンピックが彼らと私達との溝を生むきっかけになったりはしませんように。争いの種になりませんように。もう、オリンピックなんて知らないなんて言ってられない。

執筆者紹介

photo: David Duval-Smith

伊藤千枝（いとう・ちえ）

ダンサー・振付家・演出家・珍しいキノコ舞踊団主宰。1990年「珍しいキノコ舞踊団」を結成。以降全作品の演出・振付・構成を担当。カラフルな舞台美術や衣装とともに、国内外で作品を発表している。ワークショップも多数行っており、ジャンルにとらわれず、それぞれの身体の持つダンスを他者と共有し、触れ合いながら身体やダンスの「楽しさ」を体感することを目指している。映画『めがね』振付、CM『アセロラ体』振付出演、フジテレビ『be ポンキッキーズ』出演など。桜美林大学非常勤講師。
http://www.strangekinoko.com/

photo: K. Kajiyama

川村美紀子（かわむら・みきこ）

1990年生まれ、16歳からダンスを始める。日本女子体育大学（舞踊学専攻）卒業。2011年より本格的に作品を発表し、「どこからかの惑星から落下してきたようなダンス界のアンファン・テリブル」（Dance New Air 2014／石井達朗氏）とも紹介されるその活動は、劇場にとどまらず、屋外やライブイベントでのパフォーマンス、映像制作、弾き語りライブ、自作品の音楽制作、レース編みなど、表現活動を多彩に展開。
http://kawamuramikiko.com/

霜田誠二（しもだ・せいじ）

アーティスト、ニパフ・ディレクター、武蔵野美術大学造形学部・慶應義塾大学文学部非常勤講師。1953年長野市生まれ、現在在住。1969年長野高校入学後、スポーツ少年、政治少年、家出少年、文学少年を経て、1974年大阪市立大学2部文学部在学中に身体表現を開始する。1982年パリ3ヶ月滞在後、国内で様々なイベントを主催し欧米でのツアー後に1993年ニパフ国際開始。1996年ニパフ・アジア開始。2000年ベッシー賞（ニューヨーク・ダンス・アンド・パフォーマンス賞）受賞。
https://www.facebook.com/NIPAF13

photo: やじまえり

多田淳之介（ただ・じゅんのすけ）

演出家、東京デスロック主宰。古典から現代戯曲、ダンス、パフォーマンス作品まで幅広く創作。俳優の身体、観客、時間をも含めたその場での現象をフォーカスした演出が特徴。教育機関や地域での創作、ワークショップも積極的に行い、演劇の持つ対話力、協同力を広く伝える。アジア、ヨーロッパとの海外共同製作など国内外問わず活動。2014年韓国の第50回東亜演劇賞に於いて演出賞を外国人として初受賞。2010年より富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督、2015年より高松市アートディレクター。セゾン文化財団シニア・フェロー対象アーティスト。四国学院大学非常勤講師。
http://deathlock.specters.net/

塚原悠也（つかはら・ゆうや）

1979年生まれ。NPO法人DANCE BOXの運営スタッフとしての勤務を経て、2006年にダンサーの垣尾優と共にcontact Gonzoを立ち上げ、現在までメディアを問わない多岐にわたる活動を展開。NPO法人DANCE BOX主催「アジア・コンテンポラリー・ダンス・フェスティバル神戸」や東京都立現代美術館「身体の系譜」展などではパフォーマン ス・プログラムのディレクターを務める。個人名義で丸亀市猪熊弦一郎現代美術館に創設されたパフォーマンス企画「PLAY」にて2015年より3年連続で作品を発表。
http://contactgonzo.blogspot.jp/

photo: ©Kazuya Kato [FAIFAI]

捩子ぴじん（ねじ・ぴじん）

1980年秋田県出身。2000年から2004年まで大駱駝艦に所属し、麿赤兒に師事する。舞踏で培われた特異な身体性を元に、自身の体に微視的なアプローチをしたソロダンスや、体を物質的に扱った 振付作品を発表する。2011年、横浜ダンスコレクションEX審査員賞、フェスティバル/トーキョー公募プログラムF/Tアワード受賞。2016年、アジアン・アーツ・シアターが企画するOur Masters「土方巽」のキュレーターを務める。

http://pijinneji.blogspot.jp/

photo: 野村佐紀子

羊屋白玉（ひつじや・しろたま）

1967年、北海道生まれ。演出家、劇作家、俳優。「指輪ホテル」芸術監督。演劇を通して、死生観が交差する作品を、希求し続けている。国内外の演劇作品公演の他、2014年より、アーツカウンシル東京共催による「東京スープとブランケット紀行」を始動。アジア女性舞台芸術会議立ち上げメンバーのひとり。活動の場は、芸術祭、地域アートプロジェクト、ナイーヴアートなどにも及んでいる。2001年、アジアン・カルチュラル・カウンシルのフェローシップ、2008年文化庁派遣として、ニューヨークで暮らす。2006年、ニューズウィーク日本誌で「世界が認めた日本人女性100人」の1人に選ばれ表紙を飾る。

http://www.yubiwahotel.com/

photo: 青木 司

平田オリザ（ひらた・おりざ）

1962年東京生まれ。劇作家、演出家。城崎国際アートセンター芸術監督、こまばアゴラ劇場芸術総監督、劇団「青年団」主宰。東京藝術大学COI研究推進機構特任教授、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター客員教授、四国学院大学客員教授・学長特別補佐。1995年『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞受賞。2003年日韓合同公演『その河をこえて、五月』で、第2回朝日舞台芸術賞グランプリ受賞。2006年モンブラン国際文化賞受賞。2011年フランス国文化省より芸術文化勲章シュヴァリエ受勲。戯曲作品はフランスを中心に世界各国語に翻訳・出版されている。近年は大阪大学の石黒研究室と共同でロボット・アンドロイド演劇の制作にも取り組む。

http://www.seinendan.org/

photo: 松本久木

三浦　基（みうら・もとい）

1973年生まれ。演出家。劇団「地点」代表。1999年より2年間、文化庁派遣芸術家在外研修員としてパリに滞在する。2001年帰国、「地点」の活動を本格化。2005年、東京から京都へ拠点を移す。2007年、チェーホフ作『桜の園』にて文化庁芸術祭新人賞受賞。ほか、2011年度京都市芸術新人賞など受賞多数。2012年、ロンドンオリンピックの文化事業World Shakespeare Festivalの一貫としてグローブ座で開催されたGlobe to Globeに参加。近年の主な作品にイェリネク作『光のない。』、マヤコフスキー作『ミステリヤ・ブッフ』、チェーホフ作『三人姉妹』など。

http://chiten.org/

南村千里（みなみむら・ちさと）

ロンドン在住のコンセプチュアルダンスアーティスト、芸術解説者。日本画学士号取得。ロンドンのラバン校卒業後、横浜国立大学大学院修士課程修了。英国を拠点にするCandoCo Dance Companyに在籍した3年間を含め、20カ国40カ所でダンスアート活動を行う。現在、きこえない視点をコンセプトにしたダンスアートワークに取組んでいる。2012年ロンドンパラリンピック開会式に出演。2020年東京五輪を見据えて企画されたプロジェクト「スロームーブメント」に2015年よりアーティストとして参加。

http://chisatominamimura.com/jp/

photo: 斉藤翔平

山本卓卓（やまもと・すぐる）

範宙遊泳代表・劇作家・演出家。舞台上に投写した文字・写真・映像・色・光・影などの要素と俳優を組み合わせた独自の演出と、観客それぞれに「問い」を残す強度ある脚本で、日本国内のみならずアジア諸国からも注目を集め、マレーシア・タイ・インド公演や、共同制作も行っている。『幼女X』でバンコクシアターフェスティバル2014最優秀脚本賞・最優秀作品賞を受賞。一人の人間に焦点を当て作品化するソロプロジェクト「ドキュントメント」も主宰している。公益財団法人セゾン文化財団2016年度ジュニア・フェロー。

http://www.hanchuyuei.com/

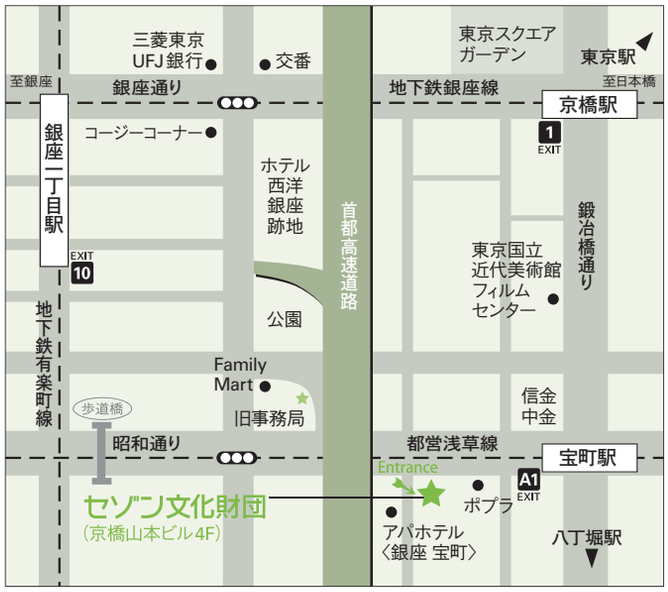
Information

セゾン文化財団　事務局移転のお知らせ

公益財団法人セゾン文化財団は、本年2月8日(月)にこれまでの銀座から京橋に事務局を移転しましたのでご案内申し上げます。新事務局の所在地は以下の通りです。
今後とも変わらぬお引き立てを賜りますようお願い申し上げます。

【新事務局所在地　2016年2月8日(月)より】
〒104-0031
東京都中央区京橋3-12-7　京橋山本ビル4階
TEL:03-3535-5566
FAX:03-3535-5565
[電話・ファクス番号は変更ございません]

アクセス:
- 都営地下鉄 浅草線「宝町駅」A1出口　徒歩1分
- 東京メトロ 銀座線「京橋駅」1番出口　徒歩5分
- 東京メトロ 有楽町線「銀座一丁目駅」10番出口　徒歩7分
- JR京葉線、東京メトロ 日比谷線「八丁堀駅」A3出口　徒歩7分
- JR「東京駅」八重洲口　徒歩15分



viewpoint セゾン文化財団ニュースレター第74号
2016年3月15日発行
編集人: 片山正夫
発行所: 公益財団法人セゾン文化財団
〒104-0031 東京都中央区京橋3-12-7 京橋山本ビル4F
Tel: 03-3535-5566　Fax: 03-3535-5565
URL: http://www.saison.or.jp
E-mail: foundation@saison.or.jp
●次回発行予定: 2016年6月末　●本ニュースレターをご希望の方は送料(92円) 実費負担にてセゾン文化財団までお申し込みください。